

モニター意見

報告—1999年6月29日に福岡県と広島県において発生した豪雨の特徴—を読んで

富士通 荒川 修一

- 気象庁以外の他の機関の降水データも利用して、2つの豪雨の検証を行っている。
- 指摘の通り、アメダス密度は、平均17キロ四方に一個所なので、こういった集中豪雨を事前に捕えたり、事後の検証に役立てたりするには限界がある。
- 今回、独自に入手した詳細な降水データを解析することによって、アメダスあるいはレーダアメダス合成図だけでは捕えきれない豪雨の生態をあぶりだすことに成功している。
- 現在の数値予報をもってしても、いどこで集中豪雨が起るかは、正確には予測できない。予報精度を上げるにはモデルの改良が必要だが、その為には事後の検証が大切。
- 気象庁では、レーダアメダス解析雨量を使って、降水に関して事後の検証をしていると聞いている。今回のような詳細な降水データが利用できれば、さらに検証精度が高まるのではないかと考えた。
- 最後に、これだけの詳細なデータを集めるには、相当な時間と労力が必要なはずであり、感服した。

無題

北原 糸子

1. 内容は、噴火前の80%まで回復した観光客などの数値が上げられているから、一定の成果が得られていると報告者は判断している。しかし、これ以上に増える気配がないという懸念も同時に示されている。

2. わたしは観光とは異なる目的で島原に行き、道の駅とセットになった火山公園で屋根に覆われた砂埋まりの保存家屋に、お賽銭が投げ入れられているのを見て観光客のこころによぎる思いの一端を見た気がした(2001年11月)。
3. 未だ記憶に生々しい火山災害地での観光化は、訪れる人も単純な観光という気持ちだけではない筈だ。この点に関する人々の意識のあり方を探り出すような調査方法を工夫する必要があるのではないか。
4. 本報告はそうした点への配慮が見られない。単なる数値でものを語ることは危険だし、なにをどのように明らかにするのかについて行政調査とは異なる視点があってよいはずだと思う。

自然災害科学 Vol. 20 No. 4 を読んで

佐竹 健治

本号の特集は、「今、水は大丈夫か?—過去の大渇水・大干ばつから学んだこと」であった。内容は多岐にわたり、「期間降水量」という概念の導入によって渇水の予測が可能になること、農業からみた干ばつの被害と対策、福岡都市圏の水資源にかんする住民アンケートの結果について紹介されている。このほか、水道事業者による節水法の紹介は、実務的な報告としてたいへん興味深かった。また、人工降雨実験の紹介は科学的に面白かった。門外漢の私にはたいへん学ぶところが多い特集であったが、あえて苦言を呈するならば、(1) 目次の小節のタイトルが間違っていた。(2) 各節を結びつける統一的なテーマに欠ける嫌いがある。(3) 議論されている例の多くは1994年の渇水であったが、もう少し早い時期に本特集を組むことができたのではないかと農業などに対する影響を評価するには時間がかかる事は理解できるが、2000年鳥取県西部地震についてのタイムリーな特集の直後だけに、タイミングが気になった。

自然災害学会について

吉岡由希子

20 卷 4 号のモニター意見や学会記事に、自然災害学会の意義などに関する内容が載っていましたので、これに関して感じたことを述べたいと思います。

日本は地震を筆頭に噴火、洪水、大雨、土砂災害など自然災害による被害を受けない年はないです。自然災害学会という自然災害を専門的に広く扱った学会は、非常に価値のある学会であると思います。

また、自然災害全般に関して、理学の面、工学の面、社会学の面など幅広い視野で捉えようとしているところに、魅力を感じますし、今後どんどん活性化して欲しいと思います。

その一端を担うためにも、論文投稿や学会発表を、自分自身積極的に行おうと思っています。

ただ最近思いますのは、防災分野では特にいえませんが、専門家や研究者と一般市民の距離が遠いということです。防災は、行政や専門家がどんなに完璧なシステムを構築しても、肝心の一般市民が活用できなければ全く意味がないと思います。そういった意味で、専門知識がない一般市民にも、ある程度理解できる学会誌や情報誌を作成することが必要なのではないかと考えます。